

## 日本中世後期における威信財と石垣—伊勢北畠氏館跡発掘事例から考える—

お茶の水女子大学 大藪 海

古来より日本列島には海を通じて様々な文化や風習、物品がもたらされてきた。特に物品は、日本中世において「唐物」と称されてもてはやされた。唐物は公家社会や武家社会に広く浸透し、中世後期に行われた日明貿易では、日本側の形式上の代表者である足利將軍家のほか、將軍家から勘合という名の参加権を事実上購入した大名や寺社が入手した。そうして入手された唐物は贈答において高級品と位置付けられたが、市場に流通したものもあつたとみられる。そのような唐物は、京都とその周辺のみならず地方にも伝播しており、地方の武家の館での発掘調査において、国産品に混じって唐物の出土が多数報告されている。

本報告で取り上げる伊勢北畠氏が本拠地としていた多気でも、北畠氏の館跡で複数の唐物が発掘されている。特に、館の最重要部分であつたと考えられている区画からは水鳥形香合、盤類・酒会壺、青白磁梅瓶などが出土しており、これらは威信財として機能したと考えられている。

威信財については、特に古代の遺物に関して研究や検討が盛んである。たとえば、邪馬台国の卑弥呼が中国大陸の魏から下賜された銅鏡は有名であろう。また近世においては、国産の高級陶磁器が威信財の役割を果たしたと考えられている。つまり古代では舶来品が、近世では国産品が、それぞれ威信財として機能していたのである。

一方中世では、舶来品（唐物）のうち特に壺や香炉など非日用品が威信財として認識されていたと考えられている。確かにそうした非日用品の所有者は階層に限られており、しかもいわゆるハレの場で使用されていたという共通点も確認できる。

しかし、それらは本当に威信財として機能していたのであろうか。上述した古代の卑弥呼の銅鏡のように、下賜行為が伴うものであればそのように評価しても良いかもしれない。だが、下賜をされた側がそれをさらに下の身分の者に与える、あるいは見せつけるような行為がなければ、それは威信財であつたとはいえないのではなからうか。下賜品ではなく市場で求めた購入品であつた場合も同様で、周囲に下賜したり見せたりする機会がなければ、それはその購入者の「コレクション」の一部にしか過ぎない。

もちろんハレの場でそうした「コレクション」を披露する機会もあつたであろう。しかしそのような場にどれほどの人物が招かれ、その「コレクション」を目にすることができたのであろうか。非日用品である唐物の一部に威信財としての役割がなかったとは言いきれないが、それを全面的に威信財と評価することには慎重であるべきであろう。

それでは、北畠氏の威信財は何であつたのであろうか。ここで本報告が注目したいのが、館跡から発掘されている石垣である。これは中世の城館ではおそらく最古の事例に属するもので、その建築目的は防御ではなく石垣で区画された場の格式を高めるためであつたと推測されている。しかし「コレクション」とは異なり、日常的により多くの人が目にすることができたこの石垣こそが、北畠氏の威信財の役割を果たしたと考えるべきである。